随　　想

技師生活 40 年を迎えて思うこと
－ 岐阜県厚生連５病院の勤務をして －

岐阜県臨床検査技師会　副会長　永　井　正　信

岐阜県臨床検査技師会 60 周年誠におめでとうございます。

私も還暦を迎え、私の人生と共に技師会の歴史が刻まれていることに対し感慨深いものがあります。技師会 60 周年の歴史を築かれた先人たちの英知と努力に対し感謝の意を表ししたいと思います。

また、私も職業として臨床検査技師を選択し、各病院にて日々勉強させていただいたことを深く感謝しております。

私が、初めて就職先として勤務したのは、関市内にあります岐阜県厚生連中濃病院でした。当時薬剤師の先生が技師長であり、現場の細かい業務については、打田先生にご指導いただきました。特に検査は用手法の時代で、ウサギの血を採取する為に飼育していた事、色々な検査の失敗談を聞く事等とても楽しい日々を送らせていただきました。(岐臨技 50 周年記念誌参照)主な担当業務は生理検査で、重要業務としてベクトル心電図、Ｐ環の解析等をしていました。

平成３年４月より、岐北病院に転勤となりました。検査室から見る中庭の桜が大変美しく瞼に焼き付いています。当時、私はトライアスロン競技に夢中になっていましたので、美濃市からランニング（16ｋｍ）して通勤したり、昼休みに農協研修所までランニングしたり、また自転車に乗り洞戸経由（60ｋｍ）で通勤したりと、体を痛めつけるのが趣味みたいな日々を過ごしていました。現在は当時より 20ｋｇオーバーのデブですが･･･。

平成９年４月より、養老中央病院の勤務となり、当時県下にて最初に導入された住友バイオファイナンスの FMS（機器・試薬・材料供給）方式の運用を任されました。初めはブランチラボの形態にて運用するのかと不安でしたが、その時に迅速検査報告の重要性・技師の意識の改革等が必要であると、改めて認識した次第です。ユニークなことは、内科前に中央採血室があり、受付嬢？(爺)として４年間、患者様の応対をさせていただき、接遇の重要性を身につけました。また病理検査の外注化・ドック検査への出向・変形労働時間制等も勉強させていただきました。反省点としては、感染症の生物学的偽陽性による陽性報告を提出したことが、今も頭をよぎります。また養老と言えば、故平田先生には、厚生連の技師の考え方、そしてスキー指導者としてのあり方等をご指導いただきました。

感謝感謝。

平成 12 年４月より、県下７番目の救急指定病院である中濃厚生病院勤務となり、15 人の技師にて当直・裏待機にて昼夜忙しく動きました。病院機能評価においては、厚生連として初めての為、土岐総合病院を訪問し手順書の重要性を伝授していただき、無事認証を頂く事ができました。また翌年より地域に信頼される病院を目指す活動として、「夏休み親子の科学教室」を開催致しました。特に検査科においては、寄生虫の観察・血液型の検査・心臓のエコー検査等子供たちが楽しく体験学習が出来た様子でした。反響も良く、以後 10 年間コメディカル全部署にて毎年開催しました。

平成 19 年秋には、スキーヤーの聖地！高山市久美愛厚生病院に勤務となり、オーダリングシステムの変更に伴う検査機器更新及び検査シス

テム変更を翌年３月までに整備する事を任されました。赴任直後でしたが先生方との協力により、順調に移行整備することが出来ました事は、関係皆様方のお陰と感謝しております。特徴として、インテグレーションタイプの分析装置を導入することにより人員の合理化を図り、生理検査に女性技師を配置することにより充実を図りました。平成 24 年５月高山市中切町に新築移転となり、県下随一の敷地面積を持つ病院として生まれ変わりました。病院の特徴としては、緩和ケアセンター・健診センターを持つ中核病院・放射線科には PET 導入・健診用新型バス４台を保有しています。検査科では、中央採血室運用にて業務を展開しています。一番の特徴は、検査プラザにて検査科・放射線科・内視鏡室の患者様の総合受付・案内をしている事です。事務職員３名を配置し、受付及び各診療ブロックから検体の回収し（20 分おき）看護師が診療・処置できる配慮をいたしました。

平成 25 年３月に退職致しますが、今この 40 年を振り返りました時、厚生連各病院の技師の皆様のご協力・ご支援を賜った事、岐阜県臨床検査技師会の先輩・仲間のご意見・ご指導そして研修会等により見識が高まり業務を完遂できた事に感謝の気持ちで一杯です。

今改めて臨床検査に携わる者として思う事は、第一にまず患者様を思い業務を改善する事。第二に臨床支援に対する検査技師のあり方。そして第三に地域に対し信頼関係を伴う行動を進めていただきたい。この３点です。

今一度初心に帰り、考えましょう！！

60 周年記念式典　H24.6.23

岐阜県臨床検査技師会創立60周年を迎え、岐阜県臨床検査技師会に期待すること

岐阜県西濃保健所　山　本　初津恵

創立60周年　心よりお祝い申し上げます。昭和25年設立の岐阜県衛生検査技術者会を前身に設立された岐阜県臨床検査技師会は、平成24年で60年を迎え700余名の会員を有する会となりました。奇しくも、今年私も60歳となり定年退職を迎えます。

技師会の活動は、平成13年に岐阜地区理事として選出され、現在まで、地区理事、副会長、監事、中部地区監事、日臨技理事、そして現在は精度管理企画委員として12年間活動してきました。

地区理事時代は健康まつり・拡大研修会・県学会などの企画を中心に活動にしてまいりましたが、その他に、精度管理調査委員会の一員として岐臨技精度管理調査の立ち上げをお手伝いさせていただきました。初回の精度管理調査では、夜中の3時まで頑張ったことも今はとても懐かしく思い出されます。

また、副会長時代には、病気で倒れた会計部長の代役として担当しましたが、過去の会計処理に不適切なところが発覚し、これもまた、勤務の終わった後事務所につめ、公認会計士の牛丸先生の指示を仰ぎながら夜中の12時過ぎまで3ヶ月間頑張りました。会員の皆様の中には過去の不祥事と簡単に思われるかもしれませんが、総会時のあの一日は長く、とてもつらい思いをしました。

そんな技師会ではありましたが、日臨技の理事を努めさせた頂けたことは私にとって大きな収穫でした。そして、日本全国には、とても優秀な検査技師がいることを改めて感じました。学術面はもちろんですが、日本の検査技師を引っ張ってゆくというリーダーシップを強く感じ、５万人の検査技師の立場を考えた大きな組織であることを痛感しました。

前会長の高田氏は、思慮深い方で、検査が好きで臨床検査を心より愛した方でした。時には、臨床検査技師のおかれている立場を考え、これからの日臨技はこうあるべきだと理事会で熱く語って下さいました。常に先を見据えた考え方であったと思います。

さて、これからの技師会に期待したいことですが、大規模から中規模病院では団塊の世代の方が多くの検査室を去り、現在では50代半ばの検査技師の方たちがリーダーとして活躍しています。しかし、それに続く中間層は採用の差し控えがあったせいか非常に少なく、現在は20代と50代の間に大きな溝が出来ています。このギャップをいかに埋めるかは非常に難しい問題であると考えています。技師会ではこのようなことを踏まえ、学術面では階層別の段階的な研修会を設けることや、組織面では検査技師のおかれている立場や法改正の動きなどテーマを持って働きかけて欲しいと思います。また、私は、岐臨技においては、女性では初の副会長となり、監事となりました。しかし、その後続く方もなく残念でなりません。会員はすでに7割が女性となっている現在では、リーダーシップをとれる女性は男性より多いと考えています。近い将来、岐阜県臨床検査技師会に女性の会長が誕生することを願っています。

最後に、技師会活動を通じて、厚生労働大臣表彰をはじめ中臨技功労賞、岐臨技会長賞を頂けましたことに対し会員の皆様に感謝申し上げます。

技師会活動を顧みて

堀　井　栄　三

1972年４月に滋賀県臨床衛生検査技師会に入会、1977年３月に岐阜県に赴任してきて岐臨技に転入して36年の月日が経ちました。最初は研修会等に参加するだけでしたが、積極的な技師会の活動についつい巻き込まれ、昭和58年から西濃地区理事を引き受ける事になりました。春の宿泊研修会は西濃地区担当でしたので企画、運営に携わりました。その当時の春の宿泊研修会は養老グリーンハイツでの開催が多く、遠く飛騨、東濃地区等から多数の参加があり、土曜日の午後から会員の日頃の業務成果発表、講師講演等を行い、夕食は懇親会で講師、会員、賛助会員が膝を突き合わせ一献かたむけながら仕事のこと、趣味のこと等をそれぞれ意見交換したり、大浴場での本当の裸の付き合いがありました。翌、日曜日には近くのグランドで男女混成チームでのソフトボール大会、前日のお酒が残っているにも関わらず参加者全員、投、打、走に夢中になり親睦を深めたことがつい最近のことのように思い出されます。雨天の場合は、大垣までもどりボーリング大会に変更しました。

昭和63年から４年間は日臨技の臨床化学検査研究班の班長を当時岐阜大学の安部先生が引き受けられたため岐臨技、愛臨技の会員と共に実務委員として出向しました。全国研修会は岐阜大学、愛媛県松山市、名古屋市、大分県湯布院町で講師講演による研修会を企画、開催しました。又、当時は分析機の装置定数による精度管理が話題に上がっていた事もあり、研修会には分析機の実習を必要とし、関東地区の技師会会員の方々の協力も得て茨城の日立製作所那珂工場での研修会を４度企画開催し出向きました。道中は研究班の会計は火の車でしたので、委員には２泊３日分の自分の必要な物だけを持って当日参加するようにと言って、私のワゴン車ともう一台ワゴン車を借りて、10数名でキャラバン隊を組み出向きました。１回目の研修会には降雪と地震、２回目の研修会では東名高速道路の通行止めのアクシデントに会いましたが４回とも成功裏に開催できたこと、往復の車中での臨床検査に関する意見交換等が楽しい思い出として残っています。

おかげさまで全ての研修会は募集定員オーバーでの開催でしたが、全国から参加された会員の方々から大好評をいただきました。もちろん岐臨技、愛臨技委員によるキャラバン隊が大活躍しました。

その後、岐臨技の会計の大役を引き受ける事になり、前任者からの山のような引き継ぎ資料をいただきました。当時は会費の管理はもちろんのこと会員管理、会員名簿作成も会計の業務で今まで全て手作業で処理されていました。私が引き受けたころには、まだＤＯＳのパソコンでしたがロータス、一太郎、桐等のソフトが普及していましたので、まずは会計業務をロータスで、会員管理、名簿作製を桐で、文書作成は一太郎でと振り分け、日夜入力業務に明けくれデータベース化をしました。あとから考えれば小生の筆不精のせいかも知れません。

２年間役員を休んで、平成６年から10年間監事を引き受ける事になり、技臨技の財務状況や理事の業務執行の状況を監査する任務を任され、今度は技師会活動に間接的にかかわりを持ち、役員の方々の大変さを痛感しました。

平成16年に技臨技活動に関与することを卒業しましたが、現在も１会員として現役を維持しています。

今思えば、技師会に最初は参加しかしていなかったのに、いつの間にか参画するようになり、最後は没入していたのかなと振り返っています。もちろん自分の仕事を最優先し、休日も惜しまず参画していたことで、より多くの新しい知識を吸収する事が出来ましたし、岐臨技や他県の数多くの同職域の会員の方々と力をあわせ企画したことを成しえ、交流できたことは今の私にとってかけがいの無い宝物になっています。

技師会は任意の職能団体です。せっかく会員として入会されているのですから皆さんも参加、参画、没入されんことをお勧めします。

最後に岐臨技の益々のご発展を祈念いたします。

養老での研修会

研修会後のボーリング大会

岐大での臨化研修会講師スタッフ

日立での研修会

岐臨技精度管理関連事業の10年を振り返って

岐阜市医師会臨床検査センター　田　中　滋　人

岐阜県の臨床検査技師会に精度管理委員会が発足したのは平成15年でした

当時の山城光俊会長より任命を受け岐阜大学附属病院の技師長である飯田悦夫先生を委員長に以下11名の実務委員と研究班班長11名でスタートいたしました

発足当時は現在のような事務所もなく、技師会の各活動もさまざまな施設の会議室等を借りての活動でした。この委員会も同様で、地区コミュニティーセンターを借りて活動していたところ岐阜市医師会臨床検査センター技師長の中村茂孝先生の御理解もあり、検査センターの会議室を使用することが出来る事となり、幾度と無く委員会メンバーとともに徹夜作業となるも作業環境は快適でした。

数回にわたる休日を返上しての会議、参加ニーズに幅広く応える為、バリューパックの提案、広報活動、個別の参加呼びかけ、これらが実を結び初年度参加は会員施設111施設のうち62施設と過去最多の参加数で好調なスタート切りました。

結果を速報形式でフィードバックする。新鮮な情報の提供も大事な使命と考えていました。しかし当時の解析システムとよんでいたものはエクセルの計算式を組み込んでシート化したようなもので各施設から返送のあったFDをコピー＆ペーストし計算式に落とし込むといった感じのものでした。エラー修正を繰り返し、間違いをなくすために、人海戦術で確認作業を根気良く繰り返しました。より良い物を参加施設へ！の思いで皆必死でした

また、初年度から黒本と呼ばれる総括集をまとめあげ、今では9冊の総括集が各施設の本棚に並んでいることでしょう。総括集のコンセプトは如何に見やすくわかりやすく、そして会員の方たちが、精度管理後も活用して頂ける本を目指しました。

技師会活動に対する情熱とボランティア精神無くしてはとても成し得なかったと当時を振り返り、後年の精度保障事業部の母体ともいえる委員会活動を支えてくださった皆さんに感謝の気持ちで一杯です。

そして、岐臨技の精度管理委員会はそれまでの実績が認められ委員会から精度保障事業部へ格上げされました。折しも、飯田委員長からバトンタッチし、精度保障部部長を拝命されたのもこのころだったと記憶しています。

また、ちょうど時を同じくして、日臨技では全国レベルの標準化事業が始まり、それに乗り遅れることなく岐臨技標準化委員会を設置し平光実行委員長を中心に5基幹施設を配し、日臨技と連携をとりながら標準化事業を推し進めました。平成23年度には精度管理、標準化事業への参加数は40施設となり、現在も日臨技標準化事業を一都道府県として支えています。

さらに、日臨技では平成22年に施設認証制度を立ち上げ、全国規模の標準化の証としてこの制度が作られました。岐阜県内で認証された施設は11施設、全国でもこの数は高く評価され、担当の日臨技理事からも岐阜県は標準化先進県との評価も受けました。また、学会のシンポジュームでは認証率の高い県として発表させていただきました。

精度保障事業部の3本柱は精度管理・標準化・

認証制度ですが、それぞれの事業に対して多くの会員あるいは施設から理解と協力を得ています。

特に岐阜市民病院検査室の山田鉄也検査部長はじめ一柳好江技師、伊藤秀明技師、平光幹彦技師らの強力なバックアップ体制もありプール血清作成が実現、日臨技推奨の生試料として配布する夢が叶いました。

高田前日臨技会長が全国紙に検査技師とは？といった概要の広告紙面を多種載せられ技師の知名度を高めるための活動を展開されました。そのなかにはこの認証施設を掲載した紙面もあり、高田会長のなされた政策の数々には感動の連続でした。一任期でしたが多くの事を我々に問いかけ将来に繋げる課題をいただけたと今も胸を熱くする想いです。

平成24年度から多和田嘉明部長にバトンタッチし、名称も変更され精度管理事業部となりました。次世代のスタートです。岐臨技精度管理事業部のますますの発展を願い、岐阜県の参加施設に大きく寄与していけることを信じて止みません。

最後に技師会活動を通じて、岐阜県公衆衛生協議会表彰をはじめ岐阜県知事表彰を頂きましたことに対し会員の皆様に感謝申し上げます。

【平成17年　撮影】

岐阜県臨床検査技師会　会長表彰

一　柳　好　江

岐臨技創立60周年を迎えられたこと、一会員として心から喜びを感じます。祝賀会開催にあたり、準備された役員の皆様ご苦労様でした。50周年祝賀会がグランドホテルにて開催され十余年、会員や役員の方々の顔ぶれも随分変わり、年月の移り変わりを感じました。

私は、長年役員を引き受けてきただけで、特別な事はなにもやってこなかったのですが、今回、岐臨技会長賞を表彰いただきありがとうございました。私が技師会活動に携わるようになったのは、いつも研修会のお世話をしてくださる役員の方にお礼をしたいと思ったからです。当時は女性の役員が少なく、理事会のなかで、女性の役員の選出をお願いしていました。大橋繁雄、岡田基、山城光俊、北村顕会長と歴代の会長と一緒に技師会活動をするなかで、随分我がままを通し大変お世話になりました。

一番思い出深いのは、「岐阜市民健康まつり」です。当時、大垣市や中津川市、高山市など各地区においては、検査技師会として健康まつりに参加して活動していたのに、岐阜市においては医師会の活動の一環として岐阜市医師会臨床検査センターの検査技師さんが検査業務をおこなっていました。岐阜市の岐阜市民健康まつりは医師会、歯科医師会、薬剤師会など6団体が実行委員会に参加して行われていました。検査技師会が実行委員会に入るには簡単ではなく、岐阜市役所、保健所、医師会センターといろいろなところに出向き、3年かかりました。今では岐阜地区の行事として定着し、若い技師さんも参加してくれます。現在の岐臨技も次世代の方々が尽力され、いろいろな事業が遂行されていることを頼もしく思っています。

今回の祝賀会に、歴代の会長の方々やOBの方々のお顔を拝見できなかったことを寂しく思いました。特に、私たちをいつも暖かく見守ってくださる岸正弘先生のお顔がなくて残念でした。岸先生は医学検査や技師会の配布資料にいつも目を通されていて、岐阜県の会員の論文が医学検査に掲載されると必ずお手紙をくださいます。いつまでも後輩の指導を忘れず、技師会を暖かく見守ってくださることに頭が下がります。このような先輩の方々が、日常的に技師会行事に参加され、豊富な経験から後輩技師を指導していただけると技師会の活性化も望めるのではないかと思います。

最後に、岐阜県臨床検査技師会の益々の発展と会員皆様のご健勝とご活躍を祈念し、次回、創立70周年の祝賀会を多くの会員でお祝いできる事を願っています。

人の役に立つ仕事

一般財団法人　岐阜県産業保健センター　羽　柴　隆　也

私は埼玉県にある東武医学技術専門学校を卒業し、上尾中央医科グループに就職しました。６年間の病院と検査センター勤務の後、瑞浪の実家に戻り、現在は岐阜県産業保健センターに勤めています。

昨年の 11 月、埼玉に住む旧友のＫから電話があり「Ｍ（沖縄県の離島出身）が実家に帰ることになった。益々会いづらくなるのでプチ同窓会を開きたい。是非来てほしい」との誘いを受けました。２週間前の突然の誘いでしたが、ＭにもＫにも 20 年近く会っておらず、ふたつ返事で「行く」と答えました。「なぜＭが突然実家に帰ることになったのか？」とＫに聞いても詳しくは聞いていない、とのこと。Ｍは臨床検査技師の免許取得後、すぐに当時制定されたばかりの臨床工学技士の免許を取得し、透析業務に従事していました。数年前に勤務する病院の事務長になったと聞いていたので、その立場で退職するということは職場でよほど大きなトラブルがあったのか？はたまた家庭の問題か？どう考えてもあまり良いことではなさそうで、どのように彼と接したらよいのか、再会の日まで色々と考えてその日を迎えました。

同窓会を開くのは夜ですが、母校を訪問するため正午に大宮駅で待ち合わせました。久しぶりに会うＭは割腹がよくなり白髪交じりで、20 年の年月を十分に感じさせてくれました。Ｍ、Ｋ、仙台から来たＳ、そして私の４人で母校へ向かいました。その電車の中で、Ｍはその理由を教えてくれました。「現在、島には透析の施設がなく、患者さんは週に３日本島まで船で渡っている。島の診療所で透析施設を立ち上げることになったので、帰ってきてくれと村長に頼まれた」とのこと。心配したのが損でした。悪い話ではなかったのです。しかしよくよく聞くと、家族は残して行く、永遠の単身赴任とのことです。家族は妻と子供２人で、上の子は間もなく大学を卒業し来年度からの就職が決まっていますが、下の子はまだ高校生です。かなりの時間を費やして家族と話し合い、相当悩んだ末に決心したことは想像に難くありません。「もともと“人の役に立ちたい”という思いで医療の職に就いたのだから、地元に帰ってもう一度やってみたい」と語る彼の眼は希望に満ちていました。そんな彼がとても羨ましく思えて仕方がありませんでした。その夜は他のメンバーも集まり、総勢９名で近況を報告しあったり、昔話に花を咲かせたりして遅くまで盛り上がりました。

さて、私が勤務する岐阜県産業保健センターは、健康診断や作業環境測定のサービス機関です。検査業務に携わることもありますが、現在は主に健康診断の計画や配車、事業所や自治体の担当者様と打合せをする渉外業務に従事しています。まさか自分が渉外の仕事をするとは思っておらず、配置換えになったときには自分にそのような仕事が務まるか、とても不安でした。しかし「石の上にも三年」の言葉どおり、長くやっていればそれなりに形になってきて、あまり苦痛に思えることはなくなりました。65 歳で定年退職と考えても、社会人生活の折り返し地点は過ぎています。この先Ｍのような華麗な転身はないでしょうが、もし新しい環境に自分の身が置かれるような状況になっても、時間がその状況に慣れさせてくれるでしょう。

次に学生時代の仲間と会えるのは定年退職のころでしょうか。現役時代を振り返ったときに“人の役に立てて良かった”と思えるように、一日一日を大切に過ごしていきたいと思っています。

目標を持って

JA 岐阜厚生連中濃厚生病院　検査科　岸　　留　美

技師会創立60周年にあたりこうして執筆の機会を頂いたことに感謝申し上げます。

私が就職してまもなく、岐阜市にて日本臨床衛生検査学会が開催されました。技師会や学会についての知識がほとんどない私は会場の熱気にただ圧倒されたことを覚えています。その後２度の産休をとりながら現在まで仕事を続けることが出来たのは周りの支えは言うまでもなく、やりがいのある職業だからと痛感しています。その中でも自身にとって大きな転機となった業務があります。それは輸血業務の一元管理にむけての取り組みです。

当院は、2000年８月に新築移転及び救命救急センター併設になった病院です。その１年程前に輸血療法委員会が発足しました。ちょうどその頃、術中の予想外の出血に対する血液供給の遅れに臨床側が激怒することがあり会議が開かれました。その席上での臨床側はとにかく威圧的で輸血業務体制の確立というには程遠いものでした。委員として出席していた私は臨床のことがあまり理解できず大変くやしい思いをしました。挙句の果てには医師に術中記録の山を見せつけられました。しかし、新病院移転という機会を逃すことはできない、上司のアドバイスもあり輸血業務の一元化に取り組もうと決心しました。学会にて一元化を実際に行った施設の発表が始まった頃でもあり、マスコミは輸血事故や医療事故を報じ始めていました。各地の研修会に足を運び、自分の行っている業務はこれでよいのだろうかと不安を持ち確かめる思いで参加していました。発表を終えられた技師の方とのお話は全く面識のない私にどなたもやさしくていねいにアドバイスをして下さるものでした。大変な苦労をされていることがひしひしと伝わってくるとともに自信に満ちあふれている姿がとても印象的でした。こうして研修会で学んだことを基にして中濃病院輸血マニュアルを作成し、半年間の会議を経て委員会で承認され一元化へと進むことができました。これは上司の理解と検査科スタッフの協力があったからと今でも大変感謝しています。

私はこの経験を通して、単に業務をするのではなく、自分の目的や目標を定めて日々の業務をすることの大切さを学びました。また、病院内で様々な職種の方と活動したことはその後の自分にとって大きな糧となりました。

現在の私は、微生物検査を行っています。自分の報告した結果が治療に直結するというとても専門性の高い分野ということを配属されて実感しました。一つでも多くの症例を経験し、研修会や学会での情報を取り入れながら臨床検査技師としてレベルアップすることを目標に頑張っていきたいと思います。